

題名：「韓国学資料研究のための学生・ポストドクワークショップin Seoul」参加報告書

氏名：呉永台

所属：東京大学大学院総合文化研究科

専攻：地域文化研究専攻博士課程（2016年3月現在）

今回の訪問先は、すべて初めてであった。これだけで、私にとって参加に値するワークショップであった。

一日目。最初に訪問したのは、世宗研究所。韓国の安保・外交部門のシンクタンクである。当日、関係者らが何度も、ここでは独立性を保ちながら政府などに政策提案を行なっていると、自負していたのは印象的であった。多岐にわたる研究活動のなか、主に日本関係のものについて、過去の業績や最近の傾向を中心に説明を受けた。図書館では北朝鮮の貴重資料を含め蔵書を閲覧することもできた。次に、隣の国家記録院ソウル記録館へ移動。政府や自治体などの諸機関から移管を受けた公文書が歴史資料として保存・管理され、その一部が一般公開されるまでのプロセスを、若干の緊張感の中で、目で、鼻で、足で、肌で体感することができた。常に歴史資料と付き合いざるをえない職業に携わる者にはたまらないひとときであった。

二日目。午前に国史編纂委員会を訪ねた。膨大な資料のデジタル化に仰天。資料の利用方法について学んだあと、その知識をその場で各自実習する機会が得られた。『朝鮮王朝実録』などのインターネット利用に関する情報は、私の今後の研究に大いに役立つことと確信した。今回のワークショップでの最大の成果であったといえる。午後には、国民大学に移動し、同大学の日本学研究者たちと、講義室で、また懇親会で交流した。酒の席で教員と院生が活発に議論することを期待していたが、両方はそれぞれのグループに固まっておき、結局それは実現しなかった。非常に残念である。それにもかかわらず、国民大学の院生らと「日本」を共通の話題に熱い議論を交わしたことは愉快で有意味な経験であった。

最終日。外交研究院の外交史料館を訪問。所蔵資料の性質、外交文書の一般公開までの流れについて説明を受けたあと、資料請求および利用方法について実習を行った。現代外交史料の扱い方は、非常に慎重であり、同時代史研究のスリルを味わったような気がする。

以上、引率して下さった先生方の配慮と学友たちの積極的な参加のおかげで、三日間のコンパクトな日程を無事に、楽しく、そしてアカデミックに終えることが出来た。日本近代史を専攻している者として、今回のワークショップは、今後の研究において日韓比較史を視野に入れることを考えさせられる貴重なきっかけとなった。